

---

# 食われた俺のゼロ魔戦記

ろんろま

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

食われた俺のゼロ魔戦記

### 【Zコード】

Z4663Y

### 【作者名】

ろんりま

### 【あらすじ】

聖剣世界に転生して、地道に生活していた俺はある日竜帝に（食事的意味で）食べられた。その竜帝も倒され、ああこれから滅ぶんだなと思っていたら目の前に光の帯が…これはいくつきやないだろう！

これは竜帝に食われた主人公が、竜帝を相棒として異世界でいろいろやっていくお話です。捏造、原作ブレイク、最強上等！（竜帝が）。主人公は中ボスぐらいい。

## プロローグ（前書き）

気づいたらやっていた。ドラまたのネタが思いつくまで気分的に更新予定。

これはアナログプロットがあるので更新早いかも。  
ドラまたH…。

## プロローグ

…ああ、終わってしまったのか。

デュランの奴が竜帝の喉を貫いたとき『中』でそう思った。

この聖剣世界にハーフエルフとして転生して早三十年。  
一年前にこの竜帝に食べられて、ずっと止まっていた時がようやく  
流れるみたいだ。

転生した最初は呆然としたなあ。なんせトラックに弾かれて気づいたらミラージュパレス。

普通こういうのって転生特典とかあるだろ? 何もないし、強いて言えばハーフエルフだけだった。

まあ、折角なので原作ブレイクしてみたいじゃん?

つて感じで主教様に魔法を教えてもらったり、ロジゴたちと平和に過ごしてたけど、何も出来なくてさ。

悔しかつたな。

でも所詮現実なんてそんなもんだ。

原作通り世界大戦が起きて、壊れしていく主教達を年齢よりもずっと幼い体で悲しく見てた。

やがて反乱軍となつたロジHたちと合流したけど、テケリよりもちつこい俺は何も出来ず、カオスオーシャンに消えていく家族を見ていた。

：最後にちやんとお別れできたのが救いだった。

その後、俺はベルガーさんに引き取られ、神官修行に明け暮れた。あ、ヒースとも仲良くなつたよ？

優しい聖都生活の中、すさんだ心は少しずつ癒された。

：リロイを救うことは出来なかつたがな。でも、数年寿命を延ばすことには出来た。

あの時は久々に泣いた。中身はとっくに成人してゐるのに子供みたいにな。

それから色々あつて、修行を続けた俺は竜帝退治の回復役として無理矢理くつついていつた。

丁度この時期ロキさんが死んでしまつたのを思い出したからだ。

ベルガーさんはこの時不治の病にかかっていた少女を看ていたから、そのかわりにな。

結果的にロキさんは救えた。ただ、フェアリーは竜帝の隙を作るために…。

攻撃魔法をそんなに使えなかつた俺はこの田を機に攻撃魔法も学んだよ。

聖都に戻ると、ベルガーさんが泣いていた。

禁呪を使ってでも少女を助けようとしてしたけど、他でもない少女に断られたらしい。

彼女は人間のまま死ぬことを選び、一月後亡くなつた。

…後で思い出したんだがこれでベルガーさんの反乱フラグが消えたんだ。

俺は少女に出来る限りの感謝をしたよ。

養父の凶行を止めてくれてありがとうございました。

彼女は笑いながら逝つた。

当然、手厚く葬つたさ。

俺達は彼女の分まで人を救おうと決意新たにし、そこから11年経つた。

たまたまアルテナにきていた俺は、魔法練習している男女に出会つたんだ。

あまりにも必死な姿に、ついつい声をかけてそれがアンジェラ王女と後の紅蓮の魔導師だと知つた。

まあその時はそこまで思い出してなかつたが。

何とか魔法を使わせてあげたいな、と思つた俺は一人を連れてウンディーネを訪ねてみた。

俺のお願いにウンディーネは快く頷いてくれて、一人は何とか水を

出すことに成功。

紅蓮さんは魔力が少なかつたからちよびっとしかでなかつたが、アンジエラ王女は滝のように出た。

…死ぬかと思つたぜ。

まあ魔法使えるようになつてよかつたな、と祝つて俺はアルテナを出る…筈だった。

紅蓮さんがクオン大陸へ行つてしまつたのだ。

あそこは倒したとはいえ竜帝の眠る場所。

アンジエラ王女に頼まれた俺はすぐさま連れ戻しにいき…既に復活していた竜帝に喰われた。

そこからの記憶は非常に曖昧だ。

なんとなーくナバールとローラントへ行つた覚えはあるんだが…何をしたかなんて覚えてない。

でも良いことをした気がするのは何でだ?

はつきり覚えてるのは仮面かぶつて各地のマナストーン解放してたぐらいかな。

多分ビコロが絶対洗脳されてたんだな、俺。

自我取り戻したのはどっからだけ…。

敵対組織をぶつ潰し、ドラゴンズホールで勇者たちと対面したとき

かな？

流石にかわいい妹シャルロットを見ればイヤでも起きる。  
…システム言うな自覚してりあ。

その時の俺の台詞、こうだもん。

「来たな。マナの剣を寄越…シャルウ！？」

「…？」

いやー、あれは面白かった。

敵味方関係なく驚いて俺見たからね。

まあそんな感じで洗脳解けた俺ですが、あつさり竜帝に連れ戻され  
ちまつて。

役に立たん！と罵倒されて再び洗脳…それかけたけどじつくりお話  
して、きちんと手を抜かず戦うと確約した。

それまで自由にしてると言われたのでウェンデルへ戻り、ベルガー  
さんとヒースにお別れを言いに行つた。

勝手に死んでごめん、さよならつて。

…今思つと竜帝の一欠片の情けだつたかもしれん。ちょこつとだけ  
感謝してやる。

で、ドラゴンズホールに戻った俺は約束通り本気で勇者たちと殺し合つて…負けた。

いやー、あいつらもつ相当の化け物だぜ。

だが、シャルロットには悪いことした。

俺はもうアンデッドだから、もつ聖都には帰れないって。

…大泣きされて打たれるわ蹴られるわ、ま、俺が悪いんだけどな?

男一人も辛そうだった。

おこにいら、野郎がそんな情けない顔するんじやない。

そう呟つて、シャルの頭をなでて俺は滅んだ。

そして今、俺は竜帝の中にいる。

真っ黒な空間で、竜帝が恨めしそうに俺を見ていた。

『貴様が奴らを殺していれば、こんなことは

いやいや無理だって。

見ただる、あいつらのチカラ。

今おまえが滅んでいるのが何よりの証拠だ。

『…くつ、いつの時代も邪龍は滅ぼされるのみか』

まあ、そういうことなんだろうつ。

でもお前はよくやつた方じゃないか? そりゃあ神様殺すなんて許せないが、出来ることでもない。

『貴様に言われても空しいだけだ……』

はいはい。

ほら、ひとつと滅ぶぞ。そんで次行くんだ次。

『次だと?』

転生って知ってるか?

実際に体験した俺が言つんだから、次に転生して一緒にバカやろうぜ。

『貴様、どこまでアホなのだ…我らはこのまま滅ぶ運命、女神にも覆せぬ』

まあ普通はそうだろうな。

でも、何となくそうならない気がする。

『これは!?』

光の帯が俺たちの目の前を横切った。

とてもないエネルギーだ。ひょっとしたら滅びかけた俺達を呼び込めるかもしねいぐらいに。

「行こうぜ竜帝! あつちで新たに人生始めよ!」

『…いいだろ? ここまでくれば未練もない。貴様につきあつてやる、ハーフエルフ!』

そこには名前で呼ぶところだらう! 一

何、忘れた？

しょ「うがない」。

「俺の名前はイオ！ ハーフエルフのイオだ！ しつかり覚えるよ  
相棒！」

『誰が相棒だ！ 元配下の分際で！』

そう言って、俺達は光の帯の中に飛び込んだ。  
だが、その後を追うかのようにハつの光が飛び込むには、気づけ  
なかつた。

## 「んじゃ異世界

光の帯を抜けた先に、女の子がいました。  
俺達の目的である肉体再生がつましくったと思つたら、これどいつ  
う状況？

落ち着け、俺達の状況を確認しよう。

肉体の再生は出来てる、理屈は知らん。

俺は竜帝に食われた時の服装のままで、ゆつたりとした雪国の服だ。

対して竜帝。「こりは打つて変わって王様が着るよつた豪奢な服だ。  
…つーか何故人間の姿になつてる？

まあ本来の姿はでかすぎるにも程があるから良いんだけど。

それにもつ一つ。

何か俺異常に怯えられてませんか？

「ゼロのルイズがエルフを召喚した…」

「エルフだけじゃないぞ、ビージャの貴族と平民まで…」

ん？ 平民？

きょりつと辺りを見回して見ると、ぽかんとしている黒髪の少年が  
いた。

どいつも状況か判つてないなこりや。そこは俺達も同じだが。

「コルベール先生！ 納得がいきません、儀式のやり直しを…」

俺たちを呼び出したっぽいピンク髪の美少女がちよつと禿気味の男性に言ひづ。

ふむ、儀式と言つていたし結構大事な事なのかね？

「すみません、状況の説明を求めます」

「そもそも貴様等塵も残さず消すぞ」

おこじらー

何物騒なこと言つてるんだよー！

「は、何を言ひ。我是竜帝ぞ、何故下等な者共を氣遣わねばならん

…そりいえばおまえはそういう奴だつたな。

まあいざとなつたら俺が抑えればいいし。抑えられるかなんて聞くなよ！」

男性は少々冷や汗をかきながら、しかし油断なく言つた。

「判りました、説明しましょう」

曰く、これは使い魔召喚の儀式だそうで、ここにいる彼女の進級がかかっているらしい。

ここ学校だったんだな。聖都にも似たようなのがあった、ここまで豪奢じやないけど。

話は戻すが、同時に複数の使い魔が召喚されたことなど未だかつてない上、俺がエルフというのが問題らしい。

契約してくれるのが否か。

契約の方法はキスらしい。

「俺は良いよ～。そもそもお嬢さんに呼ばれなきゃ死んでた身だし」

「… 我も特別に許可してやね!。そこな小僧はどうする?..」

「お、俺? … ハーん、その子が困つてゐなら別に良じけど」

少年、キスする」と前提に考えてるか?

… 多分考へてないだらうなー、何といつか能天氣っぽい。

しかし竜帝が許可を出したのは意外だ。使い魔なんて絶対にやらな  
れやつ

「……(じゅるつ)」

食つ氣だ。あの目は捕食者の目だ。

これはいかん、竜帝から絶対に目が離せなくなつた。

そんな俺の心配を知つてか知らずか、美少女はふるふると震えながら俺たちを見た。

「… か、感謝なんかしてないんだからね! へへへ、平民が貴族と  
こんなことできるのに寧ろ感謝しなさいよ!」

やつぱり、美少女は呪文を唱えつつ俺たちとキスする。  
… えーと、何かごめん? でもちょっとびつどやさしいわ。ビーセフ  
アーストキスだよ!

ズキッ！

「あいたつ！」

右手が焼けるように熱い！

…だが、まあそれだけだ。実際に致命傷負つて死んだ身としては我慢できなくもない。

「ふむう…珍しいルーンですね。少しスケッチさせて下さい」

ああ、どうぞどうぞ。

あんまり興味ないんで。

少年は左手、竜帝は俺と同じく右手に刻まれたみたいだ。

…俺たちの言葉と少し似ているな。少年のはガンダーヴル？

俺たちは…しん、く、ろ。シンクロ？  
まあ読み方があつてる保証なんてないが。

「ではこれで春の召喚の儀を終わります。ミス・ヴァリエールは彼らとじつくり話し合つて下さい」

「え！　コルベール先生！？」

「大丈夫、契約は済んだのだから。それに、エルフと言つても彼は無害だと思えます」

…」の世界のエルフは鬼か悪魔か？

「まあ、改めてよろしくお嬢さん、少年。俺はハーフエルフのイオ」

流石に俺は自分より弱いもんをいたずらの趣味はない。

「我が名は竜帝。他を知りたければ対価を寄越せよ?」

「えつと、俺は平賀才人。あのさ、これ何のドッキリ? 早く家に  
帰りたいんだけど…」

ん?

サイトよ、召喚の意味分かつてない?

「うーつのつて呼び出されるかは本人の意思で、しかも一方通行だ  
から…」

「ええっやうなのか!?

「呆れた…あんたちゃんとゲートを見て私の呼びかけに応えたの?」

「いやだつてさ、あんな面白うなの見たら…入りたくなると言つ  
か」

まあ同意はするわ。

似たような理由でやつてきたからな俺達。

しかしそうなると、サイトを元の世界へ戻してやる術が必要になる  
な。

服装からして、この世界の人間じゃないし。

ファ・ディールでもあんな服ないぞ。

「サイトのことは追々考えるとして…ルイズ嬢、ここではエルフは恐怖の対象なのか?」

「何言つてゐるよ! 私たち人間から聖地を奪つたエルフは敵よ敵! あんたもエルフなら……そういうばあんたハーフなの! ?」

そんな驚いた目で見んでも。

何々、詰まるところ俺はルイズ嬢たちの宗教じゃ異端なんですか。ほお…。

「一度、その宗教の開祖にお話してやりたい気分だ…」

「ふん、女神の教えは全ての愛を平等にだつたか? まあ元神官な貴様には許せん内容かもな」

そーだよ俺は元々クレリック!

詰まるところは聖職者。まあ他教にうだうだ言つつもりはないが、人間以外全て敵つてどんなんだよ。

人も亜人も仲良くなれるつつの一!

これで聖職者にマトモなのがいなきゃ弾圧しにいくかもしねー。  
まともな奴いますように! -

「元神官…もしかしてイオつてす」いのか?」

「ん? 回復魔法なら得意分野だよ。たとえ瀕死の重傷になつた  
も一瞬で回復してやるぜ?」

「ぐり、と一人が息を飲むのが判つた。

この世界の魔法じゃ無理なのかね？」

「回復に関しては貴様とその妹が規格外すぎるだけだ」

なんだあの超回復、どれだけ魔法撃とつと死なないなんてどんなホ  
ラーだ、と竜帝はつぶやいた。

「気持ちは分かる、次でトドメと思つたら傷一つなかつたなんてザ  
ラだからな。

しかしシャルロットが竜帝のトラウマになつてゐるとは思わんかった。

「あ、そうだ。

一応使い魔の仕事言つとくわよ？

ひとつは感覚の共有。でもこれ何も起きてないわね？」

感覚とこうと視覚や聴覚とか？　ぜんぜん共有されてないな。

「一つ目は宝石や薬草の収集。でもこれもあんまり期待しないわ。  
二つ目、主人を護ること。あんたたちつて戦えるの？」

「我をなんだと思っている、竜を統べる帝だ。世界を滅ぼせる程度  
の力は持つている」

俺除く全員が盛大に吹き出した。  
比喩なくそれだから困る。

「えっと俺は…喧嘩ぐらにならひけると思つ」

「ラスボス以外なら大体イケる

特に広範囲殲滅戦が得意だよ！とは口に出さない。まあその気になればこの学校壊すぐらいのチカラあるし…。

あ、ルイズ嬢呆れてる。

「はいはい、あんまり期待しないわよ。

あ、そうだ。流石に人間が、それも三人も召喚されると思わなかつたから、寝床の準備がなくて。

その、外で寝てもらえないかしら？」

ん、野宿か。うん、俺はかまわんよ。

…何さ竜帝。その不満そうな顔。

「いやにあっさり頷いたわね」

「でもせ、テントとかはどうするんだ？」

良い質問だサイト。

だが問題はない！ 僕には倉庫があるからなー！

ファ・ディールいちの便利魔法『倉庫』から、テント用具を引っ張り出す。

中身が無事で何よりである。

ルイズ嬢があり得ないものでも見ている目を向けてきた。  
いつとくが旅人なら使って当然なんだからなー！？

こうして、俺と竜帝の異世界一日目は終わった。

…ただ、流石にテントに男三人は失敗だったと記しておぐ。おえ。

## 「なんむすびで異世界（後書き）」

### 第一話。

規格外なのは当然です、一応は黒曜の騎士の代わりなので。  
近接戦闘も割といけます。

墮ちた聖者の戦い方に近いかも。召喚は出来ませんがね。代わりに  
狂ったようにエインシャントを使うのがイオです。  
使用魔法は割と手広いんですが出番あるのかなー。  
しかしこの小説、空気が多くそうである。

## 異世界へ日田（前書き）

予定では決闘編まで行くつもりだったのに…あれ?

「うわあ…ひどい目にあつた」

テントの外にでると、まだ夜が明けた頃じゃないか。  
神官の時の癖でそんな時間に起きてしまつた。

サイトと竜帝はまだ寝てる。

しつかし…夢じやなかつたんだなあ。

そうだ、軽くお祈りして散策しよう。

学校内はともかく、近くの森ぐらいならいいだらう。  
では女神様、今日も一日が良い日でありますよ!ついに…  
この世界には女神様いないだらうけどね。

散策終了!と!

ん? 森の生態系とか植物とか調べてただけだぞ。  
似てるようで似てないのが多かつた。: 魔法の植木鉢作つて育成で  
もするか?

種も倉庫に放り込んだいたし。

そんなことを悩んでたらいつの間にか陽が高いな。  
さすがに起こしそう。

「おーい、朝だぞ~」

「あと五分……」

「……」

……お前ら起きる気ないだろ。竜帝なんか防音結界張つてゐるし。  
ちなみに竜帝は浮いて寝てる。雑魚寝が嫌だつたらしい。  
相当シユールだ……テントがそれなりの大きさじやなけりや どうする  
氣だつたんだ?

まあ起こすけど。

「アンティマジック」

べちつ！ 魔法効果が解けて竜帝が落ちた。  
頭から落ちた氣がするが大丈夫だろ。

「サイト」

「……ふひひ」

うわあ、こらつとく。

優しく起こそうと思つたけどやめた。

「必殺！ はりせんちよおつぶー！」

「ぶふおーー？」

ズパーーン！ と良い音が鳴つた。

うん、あの時シャルにやられたんだがよく効くな！

「貴様…元配下の分際で…」

あ。

\*

楽しいお勉強の時間だー。

え、やけに棒読み？　あの後どうしたって？　聞かないで下さい。

強いて言つなら朝ご飯食い損ねたな。

で、現在ルイズ嬢の授業に同席中。全員そろつてな。

「おや、ずいぶん珍しい召喚をしましたね、ミス・ヴァリエール」

俺達割り込みましたから。

するとふとっちょの少年が立ち上がった。

「どうせその辺の平民を連れてきたんだらー、ここ一寧に飾り耳までつけてー！」

「何ですってー？」

飾り耳じゃねえぞーと、言いたいところだが黙つといった方が良いな。  
ふとっちょよ、是非とも広めてくれ！

「大体サモン・サーヴァントで二人も呼び出すのが可笑しいんだよ、  
ゼロのルイズ！」

「ミス・シュウルーズ！ 毎晩されましたわ、風邪つぴきのマリコルヌだ！」

「か、風邪つぴき…僕は風上のマリコルヌだ…」  
「これは…一つ名かなんかか？」  
しかし風上と言つことは風の魔法が得意なのか。でもルイズのゼロ  
ってなんだ？

あ、先生が粘土を飛ばして黙らせた。

うん、先生は怒らせちゃいかんよな。  
昔、魔法の師匠だったベルガーさんを怒らせたときなんか…やめよう。ダークリツチの幻影が見える。

つと、ちょっと意識飛んでたな。  
危うく魔法講義を聞き逃すところだった。ランク分け理解！

しかし面倒な魔法だ。杖がなきゃ使えないなんてな。

「なあなあ、ルイズの系統つて何なんだ？」

「わ、私は…その…何でも良いじゃない！」

おーい、五月蠅いと先生に叱られるぞつて遅かった。  
眼鏡が光ってる…。

「ではミス・ヴァリエールに鍊金を実践してもいいましょう！」

ビクツとクラスが凍りついた。

「何だ？ 怪えてるぞ。

青い顔をした赤毛の美女が立ち上がった。

「先生、やめてください！ ルイズは！」

「何です、ミス・ツェルブストー。よもや貴女まで彼女を侮辱するわけではありませんね？」

「違います！ ルイズの魔法は危険なんですよ！」

「？」

妙だな。クラスの様子からしてもただ事じゃない。だが、観察しているうちにルイズ嬢は行ってしまった。

「竜帝」

「面倒だが……心得た」

生徒はみんな机に隠れてしまったので、俺達だけ防御魔法を展開する。

ちゅぼおん！

「げつ！」

思わず声にててしまった！

ルイズの魔法はとんでもないな！ 竜帝の防壁を搖るがすとさ。

「ちゅうと、失敗してしまったみたいね」

無事なよう何よりだけど、煤けてるよ。

結果、ルイズ嬢はぼろぼろになってしまった教室のドアを詰めこみ、じられた。

俺達も手伝いを申し出たが……氣まずい。

ルイズ嬢は泣いていた。

「……魔法成功率0。だからゼロのルイズ……笑っちゃうでしょ。  
学院では、いいえメイジなら使って当然のモンスターを失敗しちゃうんだもの、お似合いよね」

そう言つて、自嘲したように笑う。

既視感におそれれる。俺はかつて、似たような人に出会つた。

『魔法を使えるようになつて、みんなに認めてもういたいの一』

「アンジョラ王女……」

咳きが風に消えた。

目の前の少女は、同じ苦しみを背負つてゐる。

サイトが言つた。

「似合つてねえよ。そんなの、全然似合わない！」

「サイト？」

「爆発するからなんだよ、それだつて立派な魔法だろ！  
他の誰にもできない、ルイズだけの魔法だ！」

「そう、その通りだ。…ルイズ嬢、聞いてくれる？..」

「…何？」

「魔法が使えなかつたお姫様のお話」

ルイズ嬢が目を見開いた。

それを肯定と受け取つて昔話のよつに話し始める。

「とある魔法王国に、一人のお姫様がいました。  
お姫様のお母様は、魔法王国最高の魔法使いでしたが、お姫様は  
魔法を使えませんでした」

すつと竜帝が目を向けてくる。かまわず続けた。

「お姫様は魔法王国の姫、魔法が使えないことはなりませんでした。  
ですがどんなに頑張つても魔法が使えることはありませんでした」

「そのお姫様は、どうなつたの？」

震える声でルイズ嬢は言った。

「見かねた神官が、精靈を頼りチカラの振り方を教えてくれました。

その結果、お姫様は魔法が使えるようになったのです

「精霊…？ そのお姫様が使ったのは系統魔法じゃないの？」

いやこれ違う世界の話だしね、とは言わない。

「彼女は、生まれ持つ魔力が大きすぎたんだ。人の身では扱えないほど！」

だから神官は強い力を持つ精霊に頼んで、チカラの振り方を教えてあげたんだ」

ルイズ嬢も同じじゃないかな、と竜帝に目を向ける。

「そうだな。小娘は我が見ても目を見張る魔力、…こちらでは精神力だつたか、を持っている。  
思わず食らいたいぐらいのな」

一瞬、朧気なドラゴンの姿が見えた気がした。

何度か見た、竜帝の本性。

「…嘘、私がそんなチカラ、持ってるわけ」

「疑うなら疑え。安心しろ、貴様は魔法が使える。チカラの振り方さえ覚えれば、特別飛び切りのな」

特別飛び切り？  
ん？

「最後まで教える義理はない、後は自分で考えろ。それより腹が空いた」

「… そうだな、早く戻ってきて飯行こうぜルイズ！」

「… もう少々気安く名前で呼ばないでよー 使い魔のくせに…」

「… いやら調子を取り戻せたみたいだ。よかつたよかつた。  
ついで竜帝、さつきの言葉つて… もしかして…？」

「何も言つな

「… ん、そうだな

まだ誰も気づいてないだろう。  
ならばその方が良い。

「… ちやつちやと戻ってきた飯に行きますか！ 竜帝も手伝えよ  
な！」

## 異世界2日目（後書き）

魔法紹介！

アンティマジック：

敵一体の全魔法効果解除、初期化。

ここでは解呪の基本魔法として扱う予定。割とよくでる？

はりせんちょっぷ：

聖剣伝説3主人公の一人シャルロットのクラス3プリーストの必殺技。

例の戦いでやられる以前から持っていたハリセンを使用。何故持つてたかは謎。

別れの戦いの時には容赦なくシャルロットに使われた。

余談だがそのカウンターでエインシャント浴びせたが倍返しが来た模様。要するに袋叩きである。

一応ただのハリセン。

**決闘?いやござれだらうれ**（前書き）

決闘編。

正直にはあまり覚えてなかつたり…。

タイトルは、お察し下さい。

## 決闘？いやこじめだひれ

決闘だ！

金髪の少年が高らかに声を上げた。ただしそれはサイトの方。

俺はとこうと、同じく金髪なんだナゾビシカ陰険そな少年に睨みつけられていた。

身に覚えが無さあれるんですけど！

少年が言った。

「ここは、貴族専用の食堂だ。そしてそこは僕の席でもある……意味分かるな、平民？」

俺が座つているここは竜帝が座つている席の隣である。  
厨房行くぞつて言つても聞かなかつたんだよ…。

面倒事の予感。

「その付け耳といへ、そつちの偉そな態度といへ、躰がなつてないようだな。

たすがあのゼロの使い魔だ、品がない！」

「…食事中に騒ぐことの方がマナー違反、品がないと思つんだが

それにルイズ嬢は関係ないだろ！」  
あ、本音がぽろつと。

「貴様、貴族を侮辱するか！」

「侮辱も何も貴様の方が品がないだらう」

そつ言つて優雅に食事を続ける竜帝。  
おい、火に油注ぐな。

あーあ、陰険少年の顔が真っ赤だ。

「決闘だ！ 平民は平民らしくすることを教えてやるー。」

「だが断る。食事の邪魔だ、失せろ」

同感だがもうちょいオブラーート【包みよ】竜帝。

すると、陰険少年は悪戯を思ついたかのように一ヤシと口角を上げた。

「そつか、怖いんだな？ そんな風に貴族の真似事をしようとも所詮は平民。

僕達貴族に比べれば下等な存在だ」

ピクリと竜帝の指がふるえた。

やばい、本気で怒つてるかもしね。そうなつたら世界終わるぞ。

…はあ。

「陰険少年。相棒の悪口はそこまでこじれてもいいわ！」

「陰険少年……だと？」

「性根の腐つてゐる悪ガキには陰険少年でも上等な呼び名だ、有り難く思おうか。

それにルイズ嬢も馬鹿にされたのじゃ黙つてられなくてね、決闘は俺が受ける」

思い切り貶すようだが少年のためだ！

さすがに聖職者としては自殺志願者を見捨てるわけには行かないし。

少年は乗るかな？

「いいだらう、その付け耳切り落としてやるー。」

「うむ、物騒な。

つて竜帝笑つてやがる…ハメられた！

そんな訳で何とかの広場。

どつせなう対2でとこいつになつたんだけビ…「うーん。

「サイトかばつのせ面倒くさいから…『仮障男くん丸投げして良い』？」

「ちよー。」

だつてサイトの売つた喧嘩だらう。

俺、基本は護身術しか使えないんだよ。

フレイルあればまとめて相手できるけど、使うのハリセンだし。

「」の方が屈辱的だからな！」

「そんな紙切れで僕たちを相手するのか？」

呆れた顔を向けてくる陰険少年もとい、ヴィリエ。

いやいやこれで十分すぎるぐらいだし。

「サイト、イオ、やめなさい！ 今なら一人とも許してくれるわー！」

「」めん、ルイズ。でも下げたくない頭は下げたくないんだー！」

「似たような感じ。大丈夫、負けないよ！」

「 つ！ 怪我するんじゃないわよー！」

それだとサイト無理じゃね？

氣障男くん ギーシュが杖を掲げる。

「では、始めよー！ 僕は青銅のギーシュ、土のダッシュメイジだー！」

「風の名家ド・ロレーヌのラインメイジ、ヴィリエだー！」

「俺は平賀才人！ おまえらのいう平民だー！」

「名乗るのかこれ？ … ただのイオだ」

「行くぞー！」

ギーシュの一聲で戦いが始まった。

ギーシュは人形を生み出し、ヴィリエは風を放つ。

順番バラバラか。おい、連携プレーしろよ。

放された風を軽くかわすと、周囲が息を飲んだのが判った。

「それが本気か？」

「つ、なめるな！」

杖に収束する風が増えたが…まだまだそよ風だな。軽くかわせる。それよりサイトの方は、早くもやばいか？ 人形に翻弄されている。怪我するなって言われてるし、さっさと終わらせますか。

「！」の、なんで当たらないんだ！

「答えは単純、陰険少年のレベルが足りないだけだ！」

ズパパン！

手に持つハリセンが、ヴィリエの頭と手をとらえた！

単純なダメージよりも、耳元で鳴った強烈な音に、ヴィリエは杖を落とした。

ヴィリエの杖を拾つてにっこり笑う。

「お前の負けだ」

「…！ 嘘だ、この僕が平民なんかに！」

ヴィリエが吠えているが無視。

「サイト、手云うだ

「手を出さないでくれ！」

はい？

いやいや、そんなぼうぼうな体で何言つてゐのを、やられるが？

「判つてゐ……でも、これは俺の喧嘩なんだ。俺がけりを付けなきゃ意味がないんだ！」

それに、俺はこいつにルイズをバカにされたのが何より許せねえ！」

「……」

……はあ。

「ここまで言われちゃ手を出す気も起きんよ。

「判つたよ、手当はしてやるから碎けてこい

そう言つと、サイトはこいつを笑つて再び人形に突っ込んだ。

そして数分後、見事にボコボコにされたサイトが出来上がった。

……流石にもつ限界だな。

「サイト、もういいでしょ！ ギーシュ、やめてちょうだい！」

「ま…だだ、まだ俺はやれる…！」

「…本当に忠実な使い魔を持ったね、ルイズ。  
僕としても動けない相手をいじめる趣味はないし、いいよ、やめ  
にじよひ」

「まだだつ！－！」

力強い叫びが、広場に響き渡つた。  
誰も彼もが動きを止める。

サイト、お前…。

ギーシュは一瞬目を伏せて杖を振るつた。

花びらが一振りの剣となつてサイトの前に突き刺さる。

「まだやる気なら、取りたまえ。これは君への贈り物だ」

「とつちやだめ！ それを握つたら、今度こそギーシュは手加減しないわ！」

ルイズ嬢、止めても無駄だわよ。

ほら、サイトは荒い息を繰り返しながらも…剣をとつた。

ぼう。

ん？ サイトの左手が光つたよつな…。

「…なんだか判らないけど、力が沸いてきた。いける…」

「…?」「

そんな！

あんなに弱ってたのに剣を構えた！？

剣を握ったサイトは、別人のようなスピードで人形を叩き壊し、ギーシュに剣を突きつけた。

ギーシュ、ヴィリエの負けが宣言される中、違和感が拭えない。

何なんだ？

「サイト！」

つと、思考にふけってる間にサイトが倒れた！

無茶しそぎだ全く！

鞄からはちみつドリンクを取り出す。高価な回復薬だが仕方ない！

「ルイズ嬢、薬だ！これを飲ませてやつてくれ！」

「え、ええ！」

見る見るうちにサイトの傷が癒えていく。  
ふう、これで一安心か。

「す、すつじい回復力…これとんでもなく高価な薬なんじゃ…」

「高いは高いが人命優先、気にするな」

ホントはヒールライトのほうが緊急には向いてるんだけどな。

でも大っぴらに魔法使つたら目立つし、仕方ない。

…でも何か別の意味で目立つた気がするのは何でだろう?

## 決闘？いや、はじめだけ！（後書き）

はちみつドリンク：

聖剣伝説3最高の回復薬。単体で999回復する。

ヒールライト：

回復魔法。効果は使用者の精神によって変動する。  
イオはシャルロットと同じぐらい効果がある。

ハリセンで戦う元中ボス。  
完全に遊んでます。

因みに竜帝は怒ったわけではなく、イオに発破をかけただけです。

## 盜賊騒ぎ（前書き）

追っ回した生徒は主にモンモンとタバサ。

決闘から五日経つた。

あの後あの秘薬はどこで手に入れたのか聞かれたけど、作ったと言つといった。

異世界産だなんて言つても信じてもらえないからな。  
実際作れないこともないし。

そうしたらしつこく聞いてくる生徒が出てきたり、お前ら最初の怯えぶりはどうしたんだ、と言いたくなる。  
因みに基本は誤魔化して逃げてる。

「」五日ずっと追いかけっこだ。疲れた。

「どうせ貴様は田立たないわけがないのだ。いつそ医者だと名乗り、  
田立てばよいだろ？」「

「確かに医者と言えるけど

聖都ウエンデルは別に寄付だけで成り立つてゐる訳じゃない。  
そこで高度な医療技術を学び、外で医者として出稼をするのも神官修行に入つてゐるのだ。

「あぐどいことやつてる奴もいたにはいたけど、やつこつのはたい  
てい自滅してたなあ。俺も潰したけど。

脱線したけど、俺はある程度以上の医療技術を備えてるから一応医者とはいえる。

「でも微妙なんだよなー…」

「まあ、どっちにしろすでに目立つていいのだ。もつと派手な印象を植え付けてしまうのも良いだろ?」「う

学院の先生叩きのめしておいてよく言つ。

ギター先生だけ? プライドズタズタにされてたなー、片つ端から風魔法弾かれてたし。

風のスクウェアなだけに自信があつたんだろうけど、相手が悪すぎた。

竜帝は嫌らしくも風魔法ばかりで攻撃し、とどめにエアスラッシュヤー使つた時には、流石竜帝だと諦観しちまつた。

：中庭の地形がちょびっと変わっただけで済んだのは幸いだろ。

当然だが、その後竜帝の行動に文句言つ人間は俺たち除いていなくなつた。

噂では東方最強のメイジとか、実は人間の姿をしたエルフだとか言われてるし。

そんな訳で、竜帝は人のことをいえないと思う。

「あんた達、ここにいたの?」

「探したぜ」

ルイズ嬢にサイトじやないか。

仲良くなつて良かつたけど、何か用かい?

「べ、別に仲良くなつてないわよ! それより、出掛けたから準備

しなさい」

「？」

竜帝と二人、顔を見合せた。

「リュウウトイはこりないだらけだし、あんた達の武器とか買っこくのよ。あと、私の用事」

曰く、近々舞踏会があるから小物を買っこいくらしい。  
…女の子の買い物って長いんだよなあ。シャルロットなんかすげく長かったし。

武器を買つてくれるみたいだけど、正直求めるレベルの武器があるとは思えない。  
まづフレイルあるか怪しこし。それに…。

「残念だけど遠慮しておくれよ。一人でトートしておこで」

「でででトートですつてー?」

「うわ、わかりやす」。

サイドの方もほんのり顔を赤くしてこるし。

「テードだら。お兄さんほんとこで行つてきな」

「お兄さんつて…イオ何歳なんだ?」

「29歳」

「「嘘ー?」「

ハーフエルフは成長が遅いんだよ。  
肉体的には15、6歳だが。

「ヒレオノールお姉様よりも上だなんて…エルフってみんなそういうの?」

俺は成長早い方だよ?

まあエルフが人間とは比べものにならない寿命を持っているのは否定しないけど。

「それはともかく、呆けてないで出掛けといで。お兄さんばっさいから」

「お兄ちゃんってこいつよつおじさんだろ」

うつさい。

そんなこというとハリセンで頭たたくぞ。

「もう、いいわよ! 行きましょうサイト」

そういって二人は去つていった。

いや、決して女の子の買い物面倒だとそういう理由で遠慮した訳じゃないからな?

……空しい。

\*

時は過ぎて夕刻。

それまで何してたって？ 魔法の植木鉢を作つてた。

倉庫整理してたら、倉庫に武器防具の種とか魔法の種が大量に出できたんだ。 少しは入れてたけど、こんな大量は全く身に覚えがないんだが。

偉大なる元主様、おしえてー？

「ん？ …ああ、まだ我に忠実だつた頃に、ガラスの砂漠で狩りまくつてたぞ」

「何で？」

「知るか」

命令されてたわけでなかつたらしい。  
まあ俺だし、多分モンスターがうざくてエインシャントあたりを連発していたのだろう。  
…なぜ素直にテレポートしなかつたんだ？

何にせよ種が大量にあるのは良いことなので、本氣で植木鉢を作つてみたのだ。

この世界はマナが多いから楽だわ〜。  
さてさて、早速何か植えてみよう！

ちゅぱじょん〜！！

「な、何だあー!？」

慌てて辺りを見回すと、学院の塔の一間にひびが入っていた！

…あれやつたの、ルイズ嬢、じやないよな？

「む、あんな所に小娘の姿が」

「流石、悉く俺の期待を裏切ってくれるな竜帝

なんてこいつたい、流石に怒られるだけじゃ済まんだろう。アリシア。  
声をかけるか否か…でも面倒事な予感。

すると。

「どーん!」という効果音がまさしく似合つ巨大な「ゴーレム」が出現した!  
…え、どいつもことー?!

「泥棒だらう。確かあそこは宝物庫だといっていた」

ちよ、それまずくね?

しかもサイト達何か戦つ気だし!

ああもうー。

「イビルゲートー！」

全てを飲み込む闇の渦が「ゴーレムを中心には生まれる…が詠唱破棄だ

と流石に全部消すとまで行かないか！

ゴーレムを半分飲み込んだところで効果が切れる。

しかし、それが嘘かのように瞬く間にゴーレムは再生した！

「どうやら土とつながる限り再生できるらしいな」

「面倒な…」

イビルゲートの上位呪文、ダークフォースの詠唱を始めるが、完成する前にゴーレムは何かを持ち去った！

なんつう逃げ足！

はあ。ダークフォースの詠唱を中断してため息をつく。

「絶対面倒事だ…」

我ながら運がないなあ。

竜帝は面白そうに笑つてゐるけど。

「いや何、思いの外貴様の慌てる顔が面白くな

こんなことなら操り人形にせずに最初から素で協力させればよかつた、と一人ごちた。

…畜生、あの時下克上しつければよかつた！

## 盗賊騒ぎ（後書き）

魔法の植木鉢：

種を植えると一瞬でアイテムが手に入る植木鉢。  
宿屋に普通に置いてあるので知識があれば作れると捏造。

エインシャント：

無属性魔法。空から隕石を降らせるが、ここでは本物降らせるわけ  
でなく、魔力で生み出した岩を降らせるものとする。  
一応本物を降らせることは出来なくもない。

凄まじい破壊力を誇るがその分消費も大きい。何気なくイオの得意  
魔法である。

イビルゲート：

闇の初級魔法。対象を起点に闇が全てを飲み込む。

ダークフォース：

イビルゲートの上位呪文。対象を闇に引き込み、全方位から攻撃す  
る。

全体攻撃をするとエフェクトが派手になる。

エアスラッシュヤー：

風の神獣の必殺技。

凶悪な風は沈黙（詠唱不可）状態へ陥らせる。

本来の威力なら中庭が余裕で全壊するが、手加減された模様。

テレポート：

敵の幹部さんだけが使える転移魔法。

因みに、アンジェラも呪文を覚えればできただろう魔法である。  
転移距離に比例して消費が大きい。

魔法に関しては基本ゲームですが、記憶が曖昧なところがあるんで間違つてたら指摘して下さい。

イオの年齢が明かされました、実は一歳サバ読んでます。死んでる間はカウントにはいるのか微妙ですが。

ちなみにギター先生はその長い鼻を叩き折つたら面白やうという理由で喧嘩ふっかけられました。  
ここは竜帝フリーダムすぎる。

ギター先生に祝福あれ。

少し訂正しました。

**破壊の杖を取り返せ！（前書き）**

フーケ捕縛編。 捕縛…編？

## 破壊の杖を取り返せ！

おっすおらイオ！ … 電波を受信したみたいだ、忘れてくれ。

予想通り面倒事になつた。

学院の宝が盗まれたことで、急遽盗賊フーケ討伐隊が編成されたのだ。

その討伐隊のメンバーの中には、ルイズ嬢も入つてゐる。我らがご主人、ルイズ嬢が行くんだから当然使い魔も駆り出される訳で、今馬車に揺られる状況となつた。

知らんぷりしようかと思つてたけど、イビルゲートをばつちり見られてたもんに行くしかないし。

「…畜生、俺は回復しかやらないからなー」

「何でそんなに嫌がつてるんだよ？」

ただの理不尽な反抗心だ。要するに言つただけ。

そりやあまあ盗みは悪いことだ。

悪いことだけど…教師が討伐隊に参加せず、生徒だけつてのに納得がいかない。

見たところタバサとロングビルさんは中々やるようだけど、あとは

実戦経験なし。

歴戦の盗賊にこれは酷い。やる氣もなくすつてもんだ。

「それよりサイト、何で剣を一振り持つてるんだ？」

「あたし達のプレゼントよー。」

ほつほつ、モテ男の自慢かこの野郎。

でも…。

「「」うちの綺麗な剣、こりや飾り用の剣だな。実戦には耐えれないぞ」

「ええ、そんなことないわよー。千エキューもしたし、店主だって一杯褒めてたのよ~。」

「千エキューがどれだけの価値かは知らないけど、事実だ。  
少なくとも素人に持たせるようなもんじゃない」

勝手に拝見しといて酷い言い草かもしれないが、事実である。  
これが使うのがデュランだつたらマシだけど…いや、本人の性格上  
使わないな。つかキレるな。

これでもう一つも酷いようだつたら、サイトは戦力外通告だが、さて。

「やるじゃねえかルフの兄ちゃん、あっさり剣の質を見抜くなんてよ」

「…喋ったー?」

鞄から抜いた瞬間、もう一つの剣が喋り出したのだ！

勝手に動き回る剣なら幾度も見たことがあるが、流石に喋る剣なんて初めて見た。

じつと剣を見つめると、何やら魔法が掛かっているのが判る。これが喋る正体か？

しかし。

「これ凄いな…所々錆びててボロいけど、手入れすれば十分使えるレベルだ」

「おうよ、このデルフリンガー様は守るための剣だからな！  
その辺の剣と比べられちゃ困るつてもんよ…」

へえ、守りの剣か。

「その心、気に入った！  
と言つわけでサイト、これが終わつたら『テルフ』といつちの剣の手入れな」

人から貰つた物は何であれ大切に。

しかし竜帝退治の時叩き込まれた知識が役に立つとは思わなんだ。

竜帝といえば。

「よくついてきたなー」

ふよふよと浮いている竜帝に問ひ。  
つか、素直に乗れよ。

「…暇つぶしだ

ん？ 何か間があったような。

「竜帝、何か隠してないか？」

「…眞うほじのひとではない」

「氣のせいだ。やつて竜帝はそっぽを向いてしまった。

「もうすぐフーケを撃した廃屋です。氣を引き締めて下さー

ロングビルさんが着めるよひで言つた。  
すこませーん…。

馬車を降り、鬱蒼とした森を歩く。

暫く歩くと開けた場所にでた。廃屋がある、あれか。  
だが人の気配がない。居るのか、本当に？

「作戦会議」

ちよこさん、ヒタバサが地面に正座した。そして枝を使って絵を描く。  
ようやくあるといひだ。

囮兼偵察役が先行、フーケがいれば挑発して外にでたところを集中砲火。

いなければ合図、といつた真合だ。

で、その囮だが…。

「どうして俺を見るのかなみんな？」

「だつて… なあ？」

「紙切れだけでメイジを圧倒した。動きも早い」

「すごい魔法使うし」

「それにエルフなんだからどうでもなるでしょう？」

まさに集中砲火。ひでえ！

「俺は回復が専門なんだよ！」

「つべこべ言わずに行つてこい」

「げしつ！」と竜帝に蹴られた。

…覚えてる、種から良いもの出てもやらないからなー。

「つか… やつぱいなじやん」

小屋を覗いて誰もいないことを確認し、合図する。  
みんな恐る恐ると言つた具合でやつてきた。

タバサは罠がないことを確認し、中へはいる。キュルケ達も続いた  
が、ルイズ嬢は見張りをするといつて残つた。  
ロングビルさんは見回り。

俺も見張り組だが… ルイズ嬢落ち込んでないか？

「どうしたのさへ。」

「…何

「落ち込んでるよう[に]見える」

ルイズ嬢はハツと目を見開くと、すぐに俯いた。

「別に落ち込んではないわ。だってフーケを捕まえればお手柄だもの」

「そうか？」

「氣のせいかな?」と、思い直すと、急に影が懸かつた。

…ん?

振り向くと、拳を振り上げているゴーレムが目に入った…ってええええ!

「ルイズ嬢!」

「きやああああつー」

間一髪、ルイズ嬢を抱きかかえて離脱。

しかしゴーレムは廃屋の屋根を破壊した模様。竜巻と炎が起こり、直後三人が離脱してきた。

「おおおお、降ろしてー！」

「あ、忘れてた」

ほい、ヒルイズ嬢を降ろす。軽くてよかつたよ。

そういうじてる間に「ゴーレムが距離を詰めてきた。すると、ぼんっ  
!と一部が砕け散った。

背後から聞こえる声で、ルイズ嬢の爆発だと判断する。

「何してんのヤー。」

「あいつを捕まえるのー。」

そう言って何度も何度も爆発を繰り返す。  
けれど少し削れるだけですぐ再生してしまう。

「ルイズ嬢、退くんだ!　！」は俺が何とかするからー。」

「それじゃ、あんたに頼りっぱなしじゃない!　私は貴族よ。

魔法を使える者を貴族と呼ぶんじゃない、敵に後ろを見せない者  
を貴族と呼ぶの!」

そう言って詠唱した呪文を解き放つ　　また爆発。  
ゴーレムとの距離はもうない!

「ああもう!ー。」

再び抱き抱えて回避!

殴られた地面が陥没して、間一髪だ。

「君、本当に心臓に悪すぞ……」

思いつきり脱力してしまつ。

竜帝はげらげら笑つてゐし……手伝えよ。

「う……めんなさい」

「何にせよ、怪我なくつて良かつたよ」

タバサの風竜がきたし、あとは任せよ。しかし、『コーレム』どうやってやつつけようか?

すると、竜帝が田の前に降りてきた。

「小娘の言葉と貴様の脱力ぶりが氣に入った。特別に我が木偶の坊をやつてやる」

脱力に着目すんな。つか、聞き違いじゃないよな?

「……貴様も対象に入れてやる」

「イエ、結構デス」

そのマナの集まりよつはあれだろ、神獣の一撃クラスだろ。そんなもん生身で食らいたくねえよ!

竜帝の周囲に集まつた膨大なマナが凝縮される。

「『ゴールドブレイズ』

ゴーレムが、凍りつき砕け散った。

破片から漏れる冷氣が肌を突き刺す。

その場の全員が息を飲んでいた。

…が、これも本来のものより威力が低い…いや、範囲を凝縮したのか？

少なくとも雪だるまにはなってないし。

「嘘やんじ無事ですか！？」

「ミス・ロングビル！ フーケはどうでしたか？」

「申し訳ありませんわ。流石名高い盗賊、逃げられてしましました」

「そう…ですか」

あ、ルイズ嬢また落ち込んでる。

元気づけようとしてか、サイトが明るく告げた。

「破壊の杖は取り戻したんだ！ 大手柄じゃないか！ …こんなもんがこんなところにあるのが謎だけど」

何かぼそっと聞こえたぞ。

かくして、盗賊事件の幕は下りたのだった。

## 破壊の杖を取り返せ！（後書き）

竜帝はきまぐれ。

まさかのフーケ未捕獲。まあ彼女もエルフが近くにいた時点で微妙に諦めてただろうけど。

精霊魔法>>越えられない壁>>系統魔法なのかな。

原作読んだの数ヶ月前だから忘れてしました…。

コールドブレイズ：

水の神獣の必殺技。食らった相手を雪だるまにする。

雪だるまかわいいよ雪だるま。

すぐ直るのでついつい放置が多かつた記憶が…。

## 不穏の陰（前書き）

武器防具の種、いいですよね。  
ただ、ムーンハウバーが六回連續で出たときは泣いた。そんなにい  
らん！

## 不穏の陰

破壊の杖を取り戻した翌朝。

昨日はパーティーと云つておいしい、飯を食べれたし、気分は最高だ。

そして今、植木鉢の前にいる。年甲斐もなく、ワクワクが止まらない。

倉庫から武器防具の種を取り出し、そつと植えた。

むくむくっ！

そして数秒後、あつといつまに花を付け、中心から一つの武器を吐き出した！

「おっしゃあああー！」

大成功！

知識はあつてもきちんと作れなきや意味ないもんなー。

早速創られた武器を手に取る。

「おお、流石に軽い」

武器防具の種で創られた武具は、使い勝手がいいんだよな。肝心の種は凶悪なモンスターが持つてるから普通は滅多に手に入らないけど。

「何を騒いでいるかと思えば… それはベルティナモールか。武器防具の種を使ったな？」

「だつて武器必要じやん。ハリセンは武器じやないし」

俺の主武装はフレイルなのだ。

剣なんて素人に毛が生えたぐらいしか使えないし。

それにもかかに楽しんでも良いじやん！

「思い出すな…貴様の妹はジャッジメントで我の鼻面を殴つてき  
たことを。

む、腹が立つてきた。おーイオ、殴らせる」

「理不尽だー！」

「ふあ！

割と本気で殴りやがったな…頭痛ー…。

「ヒールライト」

優しい光が傷を癒す。

ん、流石俺、もう大丈夫だ。

頭殴るなよ全歼。

「…つるせこなあ、何の騒ぎだよ

テントからもぞもぞとサイトが出てきた。

「お前らが早いだけだろ…ふあ

「おまよつカバイト、今日も遅いな

まあ、生活習慣だからな。

それより昨日は良かったな、ルイズ嬢と踊れて。

「でも、最初に誘われたのはイオだろ？ 良かったのか断つて」

「サイト、良いことを教えよ。俺はダンスすると、怒られるんだ」

「はあ？」

「いや…きみんとステップ踏んでるまんなのに足を踏んじやつたりなんてザラで。

妹と弟に特訓して貰つたけど直る見込み一切なし。

妹になんかもう踊るなーと叱られたな…

酷いぜシャル…兄ちゃんはせせんと特訓してたの。ヒースも苦笑してたし。

「…苦労してたんだな。つか、兄弟いたんだ」

「可愛い弟妹だ」

ヒースに身長抜かれたときは号泣したが。

ちなみに、俺はサイトよつちよつと背が低いぐらうだ。ちよつとだからな。

「…ふう」

「…笑うなつか心読むな

\*

あれから数日後。

今日も今日とて暇だ。

基本、使い魔は主人と一緒に行動するのが常だが、その辺はサイトに任せつ放しな俺らである。

竜帝はふらりとビックへ行くし、俺も探検と称して空の旅を楽しむことがある。

主教に教わった飛行術がここで役に立つとは思わなんだ。  
主教は使いすぎだけど。

ん、主教の名前？ ノーロメントで。言つたらどんな呪いがくるか  
わかったもんじやない。

ふわふわ浮いていたら、何か派手な馬車が遠くに見えた。  
結構な上空で見てるから距離感が掴めないけど、数時間後に学院に  
やつてくるっぽい？

…あれ、俺やばくね？

学院では付け耳だとかエルフらしくないエルフだと散々言われて  
るけど、一応なじんでる。

だが外となると…最悪、その場で戦争になりかねないかも？

大慌てで学院へ戻る。

そしたら、なんか変な風にめかし込んでるゴルベール先生に出会った。

「やあやあイオ君！」

「ゴルベール先生、おめかししてるけどひつたんですか？」

「ああ、急にとある尊き方々がやつてくることになつてね。

ああそうだ、君は出来れば隠れてもらえないかい？ 学院ではもつれほじではないけど、エルフはあまり印象よくないからね」

尊き方…。王族かなんか？

どちらにせよ見つかれば面倒事は避けられない。

ゴルベール先生にしつかり頷く。

わて、エリヒに隠れよう。

「とづくわけで助けてシルフィー！」

「ええい！？」

結局、戻つてタバサの風竜、シルフィードのところへ隠れるにした。

驚かせちゃったかな？

「ええいきゅい！」

「いだつ…？」「めん、悪かった、怒らんで…」

ベジベシヒロで呪かれた。

出でこけつて」とつぽいが… ももこももこじやわからん。  
それにして…。

「シルフィって可愛いな」

いやねや、ドラゴンなのにここに可愛い。

元の世界のドラゴンには良い思い出があんまりないが、この世界の  
ドラゴン… つかシルフィは好きだ。

つぶらな瞳！ 青い鱗！ 立派な翼！

ビーバーの竜帝とせばべるものにならん位可愛い。  
まああれはどちらかといつと格好良い、恐ろしいが先に来るし。 …  
そういえば最近本性見てないな？

シルフィの顔にもたれて、空を見上げる。諦めたのか、もう抵抗はない。

「……真つ正面から可愛いなんて、照れるのね」

ん？ 誰か喋った？

わよわよわよわよと見回すが、気のせいかな。

それにしても… 聞くなつてきた。

「ももこ？」

「「めん、ちよつと寝かせてー…」

かくんと、意識が沈んでいくのを感じて、俺は眠りについた。何故か懐かしさを感じて。

…目が覚めた後、再び面倒事になるとは思わずだった。

## 不穏の陰（後書き）

シルフイ好きすぎる。  
さて、どうしてイオは懐かしさを感じたのでしょうか。

### ベルティナモール

武器防具の種で手に入るフレイル……と言つていゝのか不明なぐらい  
攻撃力の高いフレイル。

一応手に入る中では最弱なのだが、普通の武器とは比べ物にならぬ  
いほど性能がいい。

### ジャッジメントス：

プリーストが装備できるフレイル。一応メルティナモールよりは威  
力が高い。

これらの装備はあくまでモンスター対応で、人に向ける装備では  
ない。

イオのクラスが謎すぎる……。

設定しといてあれですが、元クレリックレベルじゃないぞ貴様。

## 拉致られて白の国（前書き）

まさかすぐ死れる人物が登場。

拉致られて白の国

突然ですが、拉致られました。竜帝に。

シルフィイの体が思つたより寝やすくてついつい爆睡してたら、叩き起され行へぞの一言。どうゆう?

體を引締めるもやなく、あーと詫問には元氣が一寸も残らぬ。それで、さういふかの城とおぼしき場所。

…どうして状況だ？

やつてきた文官らしき人にさらに混乱  
えつとつまりな。

「状況を説明しろおおー！」

かくかくじかじかで文官さんが話してくれた事によると、ここはア  
ルビオンらしい。

空に浮かぶ白の国で、さらに言つと大絶賛戦争中の国だ。

で、何故俺が呼ばれたのかは知らないらしい、と玉座へ向かうまで  
に教えて貰つた。

今いるのは玉座への扉の前だ。

白く美しい、莊厳な扉を竜帝は遠慮なく開いた。

「連れてきてやつたぞウェールズ」

「ああ、ありがとウリュウティ殿。しかし彼は…本当にエルフじゃないか？」

そう言つて現れたのは金髪の整つた顔立ちの、いかにも王子様といった風貌の青年だった。

当然だが警戒されている。

「…どうも、昼寝してたら拉致られましたハーフエルフのイオです」

「ハーフつー？」

何か水をふっかけたような騒ぎになつた。

ルイズ嬢の反応もこんな感じだったな、懐かしい。

「静肅に！ 王の前ぞ！」

宰相らしき人の一声で玉座の間は静まり返つた。

ただ、睨みつけるような視線じゃないが、何か粘つこい視線がくるのはちょっと…。

居たたまれなくなつて竜帝に視線を向ける。

「竜帝、いきなり拉致つて何の用だよ本当に」

「すみません、イオ先生。俺が無理を言つたんだ」

「！？」 いの声！

慌てて声のしたほうへ振り返ると、真っ赤なマントが目に入った。紅蓮の炎のような赤色。

それを身に付けてるのは。

「紅蓮の魔導師！？」

「久しぶりですイオ先生」

かつてアルテナ最強と謳われた紅蓮の魔導師その人だった。だが彼はテュランとの決着をつけて自爆して死亡した筈だ。どうしてこんなところに…まさか！

「紅蓮さんも光の帯を通ってきたのか？」

「いえ、何もない空間を漂っていたら引っ張られて…ここにいるウエルズ皇太子達に救われました」

そういうて紅蓮さんはばつが悪そうに俯いた。

「…あの日は本当にすみませんでした」

「あの日？…ああ」

食われた日か。とは口に出さなかつた。

「そりやあ何で俺が、とは思つたけど気にしないよ。気にする暇もなかつたし」

主に隣にいるアリランのせいで。

まあ結果的に生き返れたし、何より紅蓮さんが元に戻つていて嬉しいな。

最後に見たのは人形みたいな無表情だったし。

「それで、ここに呼んだ理由は何？ 確かこの国は戦争中だつたと思つんだが」

「やうだ、戦争だ」

心底楽しそうに龍帝が言った。  
…まさか。

「戦争に参加させる気か？」

「いや、紅蓮の魔導師を見つけたので会わせてやねえと思つただけだ」

「龍帝様が城に乗り込んだときは何事かと思つましたが…」

がくつ！

いや、戦争に参加しないじゃなくて良かつたけどー

つーか何してんのだ龍帝ええ！

「じゃあ何で俺を呼ぶのにこんなに仰々しいんだよ…」

「紅蓮の魔導師殿には世話になつぱなしでね。私も王も魔導師殿

の師となると「J無礼できないんだよ」

「……紅蓮さんこの国で何したのさ。つか俺は師匠じゃない」

「取り合えずマシンガーレムを試作したり、反乱軍を蹴散らしたりなどを」

そう言えば紅蓮さんフォルセナ城陥落寸前にしたんだっけ…。

どこか遠い田をして紅蓮さんの話を聞く。

「あの『一ノ郎』はすごい！ たかが一  
あつと言つ間に蹴散らしましてな！」

「魔導師殿も我々が見たこともない魔法で反乱軍を一掃したり、大活躍でした！」

べた褒めである。

紅蓮さんが、ちよいと戦争終わったらじっくり話しあおうか。

「もうひと頑張りすれば反乱軍を鎮圧出来る、と言つたところで竜帝様に再会しまして。

イオ先生も一緒にいるから、つい竜帝様に頼んでしまいました」

「…もう何も言わんよ」

頭が痛い……。紅蓮さんってこんな性格だつたか？

テレポート使って帰ろうかと思うと、にっこり良い笑顔の皇太子が

そこにいた。

「是非ともおもてなしをしたいんだ。泊まつていいくと良い」

「…あの、俺ハーフエルフなんですよ？ 半分は貴方達の嫌いなエルフ」

「紅蓮の魔導師殿の師匠なんだ。悪い人であるわけがないよ

だから師匠じゃないんです。

ちょっと精靈を訪ねて力の使い方を教えてあげただけなんですけどー！

「それに、貴公の話はかねがね聞いている。ああ、勿論魔導師殿からね。それに」

異世界の者だと云ひ「ともばっちりね」と囁かれた。…紅蓮さんどこまで話してゐるや。

結局異世界の王族に対する拒否権はなく、なし崩しに王城に泊まることになってしまった。

帰つたら怒られるよな…はあ。

翌朝。

いつも通りほほ田の出に起きた俺はいつも通りお祈りをする。女神様、今日こそは帰れますよ！」

ルイズ嬢達のお怒りが怖い。

やること特にないし散歩でもするか？

と、考えていたらいきなり竜帝がやってきた。テレポートすんな心

臓に悪い！

「ふつふつふ。散歩と称して外へ行く気だろ？」

バレてーら…。しかし、早起き珍しいな。

「ん？ 少々熱が入つてな、敵の飛行船を落としていたら朝になつてただけだ。」

戦争満喫してやがる。

敵さんご愁傷様…冥福を祈つといつ。

つて、おかしくないか？

「時間掛かりすぎじゃん。本来の姿ならそれこそ一瞬で終わるんじや」

「…言つてなかつたな。何故か戻れんのだ」

え？

「嘘だろ。竜帝サマがドラゴンに戻れないなんて」

「笑えない冗談だが、事実だ。今は力が制限されている」

このルーンのせいか？と竜帝はつぶやいていたが俺にはそんな兆候全くな。

マナだつて最高に満ちてるし、むしろ死ぬ前よりも調子がいいぐらいだ。

けれど竜帝の体には制限が掛かってる…謎だ。

朝食に呼ばれるまで竜帝の体を診たが特に異常はなかつた。  
どういふことなんだろう?

## 拉致られて白の国（後書き）

といつわけで紅蓮さん（本名不詳）登場。これでパーティ組めますね！

紅蓮さんも性格捏造。敬意を払うのは恩人と上司と師匠のみで、基本はゲームの高慢ちきではあります。

紅蓮さんのステータスもほぼボス戦と同じ。  
よく考えたら…こいつら近接担当いねえええ！

マシングゴーレム：

アルテナが誇る魔導兵器。紅蓮さんは知識だけ持つて自分では作れないという設定。  
土メイジが部品を組み上げ何とか旧スペック（HOMぐらじ）レベルまで汲み上げた。

操縦者いらず、単体でかなりの広範囲を攻撃できる上頑丈。

因みに紅蓮さんは単体で攻城戦ができる（主人公がデュランの場合参照）

紅蓮さんは大砲、竜帝はただのラスボス、イオはバランス兼回復役  
というパーティ。あれ一名おかしい。

紅蓮さんがそこまで信頼されている経緯はまた次回。

追記しました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4663y/>

食われた俺のゼロ魔戦記

2011年11月20日15時16分発行